ワンポイントアドバイス

新生児～乳児期初期の便色異常は要注意！

川口市立医療センター
小児外科　原田（はらだ）　篤（あつし）

新生児期～乳児期初期の淡黄色、灰白色便には注意が必要です。この時期の便色異常は胆道閉鎖症という病気の可能性があり、早期診断を付けて治療を行う必要があります。胆道閉鎖症の場合、70～80%は生後4週間以内に便色が黄色から淡黄色に変化しますが、最初は黄色でも生後3カ月頃になってから徐々に色が薄くなってくるお子さんもいます。

胆道閉鎖症は胆汁の通り道である肝外胆管が何らかの原因で閉塞してしまう病気です。原因は発生異常説、ウイルス感染説、免疫異常説など諸説ありますが、まだはっきりとわかっていません。治療をしないと病状は進行し不可逆性(もとに戻らない)の肝機能障害を起こし、死に至ってしまいます。また、ビタミンKの吸収障害により脳出血を起こしてしまい後遺症を残してしまうお子さんもいます。このような病状の進行を防ぐため、可能な限り早期に診断を付け肝臓と腸を縫って胆汁の流れを促す手術を行う必要があります。

手術によって自分の肝臓で長期生存できる可能性が開けますが、いまだに自分の肝臓で生き続けられる患者さんは全国平均で5割程度にとどまっています。発見が遅くなり病状が進行してからの手術となってしまうケースがある事も原因の一つと考えられます。早期発見をするためには、母子手帳にある便色カードをよく確認していただき、便色異常、便色の変化に気が付いた時は速やかにお近くの病院か当院への受診をお願いいたします。